

前五世紀ギリシアの歴史家と神託

青木千佳子

【要約】 古代ギリシア社会において重要となったのは、神の意志のあらわれる神託や前兆であり、神託研究は、厳密な史料批判に基づく真偽判定に重点を置きつつ展開されてきた。しかし、このような研究が引き出した結果は、当時の人々の神託に対する姿勢との間に矛盾を抱えることとなった。筆者は、このような問題を解決し、古代ギリシア人と宗教の関わりをもう一度見直そうと試みる。そこで、その手がかりを見いだすために、前五世紀の歴史家、ヘロドトスとトゥキュデスを本論文の対象とする。二人の神託に対する態度は、全く対照的で、共通点の見られないものと従来考えられていた。筆者は、彼らの作品の中の神託を比較し、単に神託を信じていたか否かという二者択一的な結論を出すのではなく、神託を受け取るに際して何が重要と思われていたかを考察する。そして、本論文の考察によって、筆者は、神託を受け取った者の解釈の重要性が、二人の態度に共通してみられ、ギリシア人の宗教に対する態度を理解する手がかりとなるのではないかという結論を得た。

史林 七七卷六号 一九九四年一月

はじめに

「我々ギリシア人は、血のつながりがあり、同じ言語を話し、神々を祀るところも儀式の方法も同じであり、生活習慣も同じであるから、そのギリシア人をアテナイ人が敵に引き渡すようなことがあれば、それはよからぬことであろう。」^①これは、ペルシア戦争中ペルシアからの和睦の申し入れを断ったアテナイ人がスパルタ人に対して述べた言葉である。ヘロドトスの伝えるこの言葉が、実際に語られたものかどうかは定かでない。^②しかし、古代ギリシア世界には政治的に独立していたポリス共同体が多数存在していたから、ポリスの枠組みを超えた、ギリシア人共通の意識をかいま見ることので

きる言葉は注目に値する。血のつながり、言語、宗教、習慣は、古代ギリシア人の意識に深く根ざしたものであったのである。^③

冒頭に引用した言葉からわかるとおり、宗教は、古代ギリシア人にとって重要な領域の一つであった。それゆえ、古代ギリシア宗教に対して理解を深めることは、古代ギリシア史研究上不可欠なこととなる。そして、古代ギリシア宗教の特色は、おおむね以下のように指摘される。^④ まず、確立した教会組織や教義を持たないギリシア宗教が儀式宗教と言われるように、その性格を強く規定するものは、内面的な信条というよりも、いかに祭儀や儀式を正しくとりおこなうかといった行為であった。また、ポリスの下部組織の一つでありながら、宗教的な性質を色濃く残したフラトリアの存在や、ポリスによって定められた、宗教に関する役職や規定^⑤から、国家と宗教の結びつきの強さも見る事ができる。さらに、ポリスの社会生活のさまざまな場面においても、祭儀や犠牲がひんばんにおこなわれた。

先にかかげた神事に関わる事柄が機能するためには、神によって認められることが必要と考えられ、そこで神の意志を伝える神託や前兆が重要となってきた。これら神託や前兆がポリス社会においていかに大きな意味をもっていたかということは、ポリスによってたびたび神託がうかがわれたことが碑文に残されていることや、神託にかかわるものとしてクレースモロゴス、マンティス、エクセゲテースの存在が確認されることから明らかである。彼らは宗教的な事柄について人々に忠告したりした。こういった観点から考えても、宗教的権威を裏付けるものとしての神託の働きは決して見過ごすことができない。

また、古代ギリシア社会の宗教生活において、神託や前兆の重要性は、単に宗教制度の認可、権威づけにとどまらず、当時の古代ギリシア人の思考、行動に関わるところにまで及んでいた。そのため、神託や前兆などがどのような影響を彼らに与えたのだろうかという問題が、たびたび論じられてきている。ことに、文献史料の中に頻繁に姿を現わす神託に関する研究は、ギリシア宗教の一面を明らかにするために欠かすことのできないものの一つであり、デルポイの神託の研究

を中心に展開されてきた。その研究史について簡単に整理してみると、次のようになる。古典的な見解は、文献に残された言及を無批判に受け入れ、神託の影響力を積極的に見ようとしたものであった。ところが、一九五〇年代以降の神託研究は、厳密な史料批判に基づき、神託の現実の姿や影響力を明らかにすることに重点を置いた。^⑧この傾向のある研究を代表するものとして挙げられるのは、クラエイとフォンテンローズによる研究であろう。

クラエイは、ヘロドトスの『歴史』に残された神託について、さらに、フォンテンローズは、デルポイの神託すべてについて、実際に下されたものかどうかを検討した。彼らは、現実の下されたと判断した神託と、文献に残された神託とをそれらの形式や内容といった点から比較したのである。そして、その結果、文献史料に残された神託のほとんどが政治的なプロバガンダや敗戦の弁明の手段として、神託を下すことに直接関わるものなかつた人々によって作り出されたこと、両者はほぼ同じ結論を出した。^⑨実際に神託でうかがわれていたことは、祭儀設立や宗教法の制定に際しての簡単な認可など宗教的な領域に関わるものに限られ、神託が現実の社会の動向に大きな影響を与えなかつたということも、明らかにされた。

しかし、彼らの導き出した結論が矛盾をかかえていることも確かである。すなわち、彼らの研究によって実際に下されていないと判断された神託を多くのギリシア人が信じていたことは、文献史料から容易に知ることができ、その隔たりをどのように説明するかという問題が残されたのである。^⑩このような問題が残ったのは、彼らの研究対象が神託を受け取つた人々の対応や姿勢にまで視点を広げることができなかつたためである。それゆえ、神託の実態は何かという問題に終始することなく、むしろ、神託を受け取つた人々の態度に目を向け、神託を受け取る時に何が重要であつたのかを、文献史料から引き出す必要があるだろう。こうした手続きは、宗教と密接に結びつく古代ギリシア社会の理解にとって、有効であると思われる。なぜなら、宗教と密接につながつたポリス社会に組み込まれた制度と人々の意識との間にある独特の接点を見出だせば、古代ギリシア社会の一面に、新たに光をあてることになるからである。従来制度と意識の中にある宗教

は、つながりをもって語られることが少なかつた。それゆえ、有機的に二つをつなげようとする試みは、必要であるようにも思われる。そこでその接点となるものとして、ポリスの制度の中にも組み込まれ、なおかつ人々の意識にも大きな影響を与えたことが史料からうかがわれる神託について、取り上げてみたいと思う。

このような研究史とその問題点をふまえて、本稿においては、前五世紀の二人の歴史家、ヘロドトスとトゥキュデデスの神託に対する姿勢について考察する。この二人の歴史家は対照的に捉えられることが多いが、宗教に対する態度に関して論じられる時、その傾向は一層強くあらわれる。しかし、古代ギリシア世界において重要であった宗教に対する態度について、同じ世界に生きた二人に全く共通点を見出だすことはできないのであろうか。二人の歴史家が宗教に対してどれほどの距離をとっていたかという問題は、彼らの歴史家としての評価にも関わってくる。しかし本稿では、二人の歴史家について史学史的に問題を収斂することなく、古代ギリシア人一般に共通する特質なるものを見出だす手がりとして、二人の歴史家の神託に対する態度を比較してみることにする。

それでは、次に、二人の歴史家が宗教との関連においてどのように評価されていたかを概観し、問題を改めて整理する。

- ① Hdt. VIII.14 など、*クロノトス『歴史』*の訳文は、基本的に試訳であるが、松平千秋訳も参照した。
- ② W. W. How and J. Wells, *A Commentary on Herodotus*, vol. II, Oxford, 1936, rep. ed. p. 286.
- ③ C. Sourvinou-Inwood, "What is Polis Religion?" in *Greek City from Homer to Alexander* O. Murray and S. Price ed. Oxford, 1990, p. 300.
- ④ 古代ギリシア宗教の特質については、*ギリシアの宗教* (M. I. Finley ed., *The Legacy of Greece*, Oxford, 1984, p. 4-6; J. V. Muir, "Religion and the New Education", in P. E. Easterling and J. V. Muir ed. *Greek Religion and Society*, Cambridge, 1985, p. 193-195.
- ⑤ Aristotle, *Athenian Politeia*, ch. 21, 43, 47, 54, 57.
- ⑥ シレースキロコス、マンティス、ヒシセゲータースについての言及は、断片的に史料から見出すことができるが、どのような役割、性質があったのかとどう点に關しては明らかでない。以上の役割について J. H. Oliver, *The Athenian Expounder of the Sacred and Ancestral Law*, Baltimore, 1950 の研究が、
- ⑦ L. R. Farnell, *The Cult of the Greek States* vol. 4, Oxford, 1907, p. 189f. F. Poulson, *Delphi*, trans. by G. C. Richards, London, 1920, p. 24ff. など、神託の影響力についてはこれらの肯定的な見方が、一方、懐疑的な見解を持つものも、A. S. Paase, "Notes

on the Delphic Oracle and Greek Colonization", *Classical Philology*, 12 (1917), p. 1-20.

⑧ 本稿はきつて触れるもの以外に神託研究の代表的なものとして挙げられる。P. Amandry, *La mantique apollonienne à Delphes: Essai sur le fonctionnement de l'oracle*, Paris, 1950; J. Deiradas, *Les thèmes de la propagande delphique*, Paris, 1954, H. W. Parke and D. E. W. Wormell, *The Delphic Oracle*, 2 vols, Blackwell, 1956. なにかある。なか。これらの研究はこころへ、ヒルソンが "Das Del-

phische Orakel in der neuesten Literatur", *Historia*, 7 (1958) S. 237-250 にならう。簡単に紹介して、問題を指摘してこころ。

⑨ R. Crabay, *La littérature oraculaire chez Hérodote*, Paris, 1956.

⑩ J. Fontenrose, *The Delphic Oracle*, Berkeley, 1978.

⑪ Fontenrose, op. cit., p. 233f.

⑫ K. H. Waters, *Herodotos the Historian*, London and Sydney, 1985, p. 107.

第一章 問題の所在

本章では、ヘロドトスとトゥキュディデスの宗教的な領域に対する姿勢がどのようにとらえられてきたかを整理し、本稿で具体的に取上げなければならぬ問題をより明確にする。

宗教的な領域に対する二人の態度については、全く正反対の評価がなされてきた^①。ヘロドトスは神託や前兆や夢などの超自然的な要因や伝統的な宗教を深く信じていたのに対し、トゥキュディデスはそれらを迷信としてしか考えていなかったとする見解が、広く受け入れられてきたのである。

まず、ヘロドトスに関して言えば、彼が神託をはじめとする伝統的な宗教を受け入れていたという点を前提に、そういった彼の宗教観がどれだけ『歴史』に「深み」を与えていたかということが問題になっていた。彼が神託を信じていたということは、それ以上問い直すことができないほど自明のこととして考えられている^②。

一方、トゥキュディデスについては、一九七〇年代に数は少ないが興味深い研究が現われた。最初に取り上げるのは、一九七五年に発表されたオーストの論文である^③。オーストは、トゥキュディデスが伝統的な宗教を信じていなかったとする従来の見解を検討するために、宗教に関するさまざまな言及について考察した。そして、その結果、トゥキュディデス

が古代ギリシアの宗教を単なる迷信として片付けることはせず、神託にも理性的、科学的な関心を持ってみていたと、彼は結論づけた^⑤。さらに、彼の研究に触発された形で、宗教にかかわる領域とトゥキュディデスとの関わりを全面的に考察したのは、マリナトスである^⑥。

マリナトスは、曖昧な神託に着目し、それらを個別に検討し、先のオーストとほとんど同じような結論を引き出している。トゥキュディデスの批判は神託そのものに対してでなく、神託を操作する予言者たちに対してなされており、神託をトゥキュディデスが受け入れており、神託の正しい解釈に一貫した関心があったと主張した^⑦。

彼らの着眼点はトゥキュディデスを前五世紀の状況において評価することがあったので、従来の見解で否定されていた、古い伝統的な思考が根強く残る宗教の領域とトゥキュディデスの近さを強調しようとしたのは当然のことであった。

しかし、このようにトゥキュディデスの宗教との関わりについて再検討を促す研究が現われたにもかかわらず、トゥキュディデスが神託を信じていなかったとする見解は依然根強い^⑧。

たとえば、パウエルは、オーストの主張に対して徹底的に反論を試みている。また、ドーヴァーは、オーストの主張の一部を認めながらも、やはりトゥキュディデスが神託を信じていないという見解を全面的に修正するには至っていない。

以上、二人の歴史家の神託に対する態度についてのこれまでの評価に簡単に触れたが、これをふまえて問題を指摘することにしよう。

二人の神託に対する態度についてみる時、従来は神託を信じていたかいないかを焦点に論じる傾向が強かった。これは、歴史叙述から非合理的な要素を取りのぞきどれほど合理的に歴史を説明するかといった、歴史家としての評価と関連させられて論じられてきたことによるところが大きい。また、欧米の研究者にとって、伝統的な宗教を信じているかいないかという問題は重要だったとも思われる。このことは、トゥキュディデスに対する評価について特に当てはまることであろう。オーストもマリナトスも神託の解釈について触れているけれども、やはり彼らも従来のトゥキュディデス像を否定す

るのに終始し、神託を信じているかいないかの問題に力点が置かれた形になってしまっている。何よりも、彼らはトゥキディデスとはほぼ同時代に生きたヘロドトスに触れておきながら、ヘロドトスの宗教観については、神託を信じていたという前提のもとにたっている。また、彼らに対するパウエルやドゥヴァーの反論も、神託を信じているかいないかといった点に議論を集中している。

このような論争をふまえて、本稿ではこれまで個々に論じられ、全く対照的な性質を持つものとして捉えられてきた、二人の歴史家の神託に対する態度を比較する。それゆえ、問題は二人の歴史家の態度に何か共通点となるものがなかったのかという点に絞られる。

それでは、次の二つの章で、二人の歴史家が神託をはじめとする超自然的な要因をどのように受け取っていたかについて、史料に即してそれぞれ見ていくことをする。

- ① J. Clasen-J. Steup, *Thukydides I^o*, Berlin, 1963, lxi-lxii; A. et M. Croiset, *Histoire de la littérature grecque* IV, Paris, 1900, p. 110-11; Th. Gomperz, *Greek Thinkers*, trans. by L. Magnus, London, 1901, p. 510; J. B. Bury, *The Ancient Greek Historians*, New York, 1908 p. 128 ff.; K. Latte, "Orakel" *RF* xviii, 1939, 852; J. N. Topoulos, "Thucydides' Prognosis and the Oracles", *CW* 39, 1945-46, p. 29-30; Park and Wormell, op. cit. vol. I, p. 180; M. P. Nilsson, *Geschichte der Griechischen Religion*, I³, Munich, 1967, S. 717.
- ② J. Hart, *Herodotus and Greek History*, London and Camberra, 1983, p. 43 f.
- ③ トゥキディデスが伝統的な宗教のもとに立ってたとする見解は、一九世紀半ばにいくつも見られるが、それ以後、その立場に立ってパウエルやドゥーヴェンを見ることが、ほとんどない。なお、トゥキディ
- ④ N. Marinatos, *Thucydides and Religion*, Konigstein/Ts., 1981, chapter 1 註釋 2-4 参照。
- ⑤ S. Oost, "Thucydides and the Irrational: Sundry passage", *Classical Philology* 70 (1975), p. 186-196.
- ⑥ S. Oost, op. cit. p. 195.
- ⑦ Marinatos, *Thucydides and Religion*: do, "Thucydides and Oracles", *JHS*, 101, 1981, 138-140.
- ⑧ Marinatos, *Thucydides and Religion*, p. 47.
- ⑨ A. Powell "Thucydides and Divination" *Bulletin of the Institute of Classical Studies University of London* 26 (1979), p. 45-50. K. Dover "Thucydides on Oracles" K. Dover, *The Greeks and their Legacy*, Basil Blackwell, 1988, p. 65-73. 註 41 S. Hornblower, *Thucydides*, Baltimore, 1987, p. 182 註 24 参照。

同様の見解が見える。

第二章 ヘロドトスと神託

一 ヘロドトスの信心

ヘロドトスの描く歴史の大きな特徴として挙げられるのは、神託や前兆や夢などの超自然的な要因や神話についての言及を、あちこちに見ることができるといふ点である。^①彼は、おりに触れて人間の力では考えられない奇跡について述べたり、異国の神々について熱心に知ろうとする。このような探究心は、彼の『歴史』に一貫してあらわれるので、宗教に対する関心は、大きいものであったことがうかがえる。とりわけ神託についてみると、その関心の大きさが、もっともよく表れていると言える。

『歴史』の中でヘロドトスが取り上げた神託の数は百にもものぼる。これほど多くの神託が一つの文献の中に現われるのは、ギリシア古典中他に例がない程である。その上、神託は、さまざまな形態となつて『歴史』の最初から最後まで現われ、パークが指摘したように、『歴史』を形づくる枠組みと神託を捉えることができる。^②このような神託のどの点をヘロドトスが信じ、どの点に懐疑的だったかをまず確認しておきたい。

ヘロドトス自身が神託を信じていたということは、サラミスの海戦でギリシア海軍がペルシアを撃破する経過を語る時、明らかである。^③この言及で、彼は、神託への信念を明らかにしただけでなく、前五世紀中頃に高まってきた神託への懐疑論に対して、反論を試みたとも指摘されている。^④

また、エジプトの広さについて、自説も含めいくつかの見解を紹介し検討した後、彼は、次のように述べている。

「エジプトは私（ヘロドトス）が言葉で示したような広さであるという私の意見について、アンモンで下された神託も証拠となる。

しかし、エジプトに関しての私自身の意見が固まった後に、私はそれを聞き知った。……」（二一—一八）

ここで、自説の確かさを示すためにヘロドトスがわざわざ神託を持ち出してきたことに注目すべきであろう。アンモンはエジプトの神託所であり、前五世紀のギリシアにおいても広く知られていた。^⑤ヘロドトスは、自らの確信がある場合には、この例のように神託そのものが真実を語るものとして、どこの神託であれ信じたのである。

しかし、一方では、神託を捏造したり、故意に選んで聞かせたりする預言者や、巫女を買収して神託を操作したスパルタ王^⑦についても触れている。それゆえ、彼が情報として得た神託が必ずしもすべてが本物ではないという警戒心をヘロドトスをもっていったと思われる。それでも、以上に挙げた事例はすべて人間が神託に対して何らかのはたらきかけがあった場合であり、神託そのものの性質に関わる問題ではなかった。そのような観点で見ると、神託を受け取った人間に対する彼の見解、また彼自身の神託に対する対応をもう少し丁寧に見ていく必要がある。

以上で述べたことを明らかにするために、次に、『歴史』の冒頭を飾るリュディア史について検討したいと思う。

二 リュディア史と神託

ここでは、ヘロドトスがどのような点において神託の重要性を見出だしていたかを、より具体的に見るために、『歴史』の冒頭を飾るリュディア史の中にあらわれる神託に絞って考察する。

ヘロドトスの歴史叙述の出発点は、ギリシアでもペルシアではなく、リュディアと呼ばれる、小アジアに前六世紀半ばまで栄えた国であった。では、ヘロドトスは、なぜそのような国から記述をはじめようとしたのだろうか。まず、考えられることは、リュディアがギリシア人にとって馴染みの深い国であったためということである。歴代のリュディア王は、デルポイをはじめギリシア各地へ多くの奉納物を納め、ギリシアと縁が深く、ことにクロイソスは、ギリシア人によく知られた人物だった。このようなことから、小アジアの状況を説明するため、ギリシア人によく知られた国から取り上げていったという指摘も実際になされている。^⑧しかし、そのような指摘よりも説得的であるのが、運命の範例であるとする見

方である。^⑨ 栄華を極めたクロイソスが破滅へと転がり落ちてゆく過程は、因果応報による運命の変転を表わす範例として、ヘロドトスが序文で書き表わした主題を例証する格好の例であると、多くの研究者が論じてきた。クロイソスの破滅への過程は、単に異民族の抗争を示す以上に、ヘロドトスにとって深い意味を持つモデルであったとみなすことは誤りではないだろう。

それでは、そのように『歴史』を理解する鍵となると考えられるリュディア史において、神託がどのように現われているかを整理しよう。リュディア史に現われる神託は全部で一四例である。^⑩ そして、その中でクロイソスに関するものは五例ある。^⑪ ただ、この神託の中で注意を要するのが、リュディア史にたびたび現われる脱線の中にも、かなり多くの神託が記されていることである。^⑫ ギリシアに関する脱線に現われる神託は、クロイソス自身に下されたものではないが、後述べるとおり、これらの神託もヘロドトスが神託についてどのように捉えていたかを見るために重要である。

これらの神託はデルポイで下されたものがほとんどである。そして、これらデルポイにまつわる逸話は、ヘロドトスがデルポイにおいて得たもので、これらはデルポイが秀でていることを示そうとしたプロパガンダ、道徳的な要素の強い後世の作り話とみなされている。^⑬ では、ヘロドトスは、デルポイ賛美ともとれる、それらの逸話に納得していたのだろうか。結論を先に言えば、ヘロドトスは、デルポイから得た話に納得していたと考えられる。もしデルポイの一連の話を否定してしまうと、ヘロドトスの考える因果応報の原理や歴史的枠組までも否定することになりかねないからである。この点については、ヘロドトスが神託に納得し、それらを『歴史』に取り入れたと考える。

次に、クロイソスに関わる神託について見てみよう。五例の神託のうち、ここで検討するのは三例の神託である。これらの神託は、いずれもクロイソスのペルシア遠征に深く関わるもので、うち二つは、曖昧な神託の典型的なパターンとして何度も取り上げられている。一つは、ペルシア遠征の是非について問うたもので、もう一つは、リュディアの繁栄について問うたものであった。これら二つの神託は主語が特定されていないか、謎掛けの要素があり、受け取った人の誤解を

招きやすい曖昧な神託だった^⑤。クロイソスも神託を誤解して自分の国を滅ぼしてしまったのである。神託そのものの分析は他に譲り、ここでは、神託を受け取ったクロイソスをヘロドトスがどのように描いているかを見てみなければならない。さきの神託に対するクロイソスの態度について、ヘロドトスは次のように語っている。

「クロイソスはかえってきた神託を聞いて、たいそうこの神託に喜び、キュロスの覇権が滅びるものとすっかり期待して……」（一五四）

「以上のかえってきた言葉にクロイソスはことのほか喜んだ。らばが人間に変わってメディア王になることは決してなく、従って、クロイソスは自分の覇権が決して終わることはないと思ったからである。」（一一五六）

これらには、神託を受け取った時クロイソスがどのように解釈し、喜んだかが書かれている。

さらに、クロイソスがペルシアに兵を進める時に、ヘロドトスは次のように述べる。

「クロイソスは神託を誤解して、カッパドキアに兵を進めて……」（一一七二）

「クロイソスは以下のような理由で、すなわち、領土欲に駆られて自らの領土にさらに領土を加えたいと望んだためだが、とりわけ神託を信じたためとアスチュアゲスの仇を討ちたいと思っただけのためにカッパドキアに兵を進めた。」（一一七三）

「キュロスに恨みを抱いていたクロイソスは、神託所に使者を遣わしてペルシアに兵を進めるべきかどうかたずねたが、その時疑わしい神託が届き、彼は神託が彼の側に立っているものと思ひ込み、ペルシアの領域へ兵を進めた。」（一一七五）

この言葉は、全く同じペルシア遠征を述べたものであって、わざわざ繰り返し返し神託を受取ったクロイソスの誤解を強調している。ここから、もしヘロドトスが何にもしくはだれに批判を向けているのかを考えるならば、神託を受け取り誤解した人々に向けられたと考えられるだろう。クロイソスの一連の行動を記す中で、批判めいた言葉と誤解という言葉が何度も繰り返し現われるのは、神託を理解できずに身を滅ぼしたクロイソスへの批判がこめられていると考えてよいはずである。そして、神託に対するヘロドトスの態度について言葉となって現われるのが、リュディアの滅んだ後にクロイソスが受

けたとされる、かなり長いデルポイの神託である。この神託は、デルポイがリュディアの滅亡を予言できなかったのを弁明、合理化しようとしたものとされている。その神託の言葉の中に、リュディア滅亡の原因は、まず第一に、定められた運命であるが、それとともに神託をクロイソスが誤って解釈したこともあわせて挙げられているのである。

さらに、クロイソスの破滅の過程の中に現われる他の神託を見る。リュディア史の中に、本題から離れる話、ギリシアのポリスについて触れた部分がある。その中に現われる神託のうち、アテナイ人ペイストラトスが僭主政を打ちたてる時に受け取ったとされる神託に対する彼の対応と、テゲア攻略の際にスパルタが受け取った神託に対するスパルタ人の対応^⑬について目を向けてみよう。

ペイストラトスについて、ある預言者から告げられた神託の真意を理解しそれを受け取り、アテナイを手中に納めたとヘロドトスが述べている。ここでは、神託の解釈が事態の好転に大きく寄与したと明確に記されていない。

このペイストラトスの例よりも得るところの多いのは、スパルタの例である。ヘロドトスはアテナイにつづいてスパルタの状況についても詳細に語る。その中で、スパルタが対外的に勢力を持つようになったきっかけとして、テゲアの攻略に触れている。そして、スパルタは、このテゲア攻略に関連して神託をデルポイから二つ受け取っている。この二つの神託はいずれも曖昧な神託だった。事実、最初に受け取った神託を誤解して、スパルタは苦杯をなめていたのである。

そのような状況からテゲア攻略に成功するきっかけとなったのは、二つ目に下された神託である。その神託も、神託の言葉が謎掛けになっている点で、クロイソスに下されたものと全く同じ曖昧な神託であった。ここで注目したいのは、ヘロドトスの次の言葉である。

「そのような人であった（善行衆と呼ばれる役職）リカスが運と知恵によってテゲアにおいて（オレステースの遺骨を）見出だした。」（一一六八）

リカスが遺骨を見つけたのは、たまたま立ち寄った鍛冶屋の言葉から、神託の真意を理解したからであった。その結果、

スパルタはテゲアよりも優位に立ったという。この時、ヘロドトスはリカスがいかにして曖昧な神託を理解したかを詳細に記している。そのように機会を捉えて知恵を使って成功に結びつけたリカスの解釈と行動をヘロドトスは「運と知恵によって」と表わしているのである。

ペイシストラトスとスパルタにまつわる逸話の持つ意味は大きい。神託の解釈によって得られた彼らの成功を伝える逸話は、クロイソスの破滅という本題から離れたエピソードの一部にすぎない。しかし、歴史の原理を理解するためのモデルにこのような話を折り込むことによつて、クロイソスの神託の誤解は際立つものになった。このような成功と対照的に描かれる、クロイソスの神託の誤解は非難されて当然のものであった。裏を返せば、神託の解釈が重要であったということになる。このことは最後にデルポイの長い神託の言葉となつて現われたと見ることができよう。ただし、このリュディア王クロイソスの破滅の過程に関わる神託についてヘロドトスが述べる時、彼自身はつきりと神託の解釈が重要であると言っていない。しかし、先にも述べたように、このリュディアの滅亡は運命の変転の範例であつて、彼が歴史を記すにあつてもっとも強調したい部分であつた。それゆえ、ここにあらわれる神託の誤解に対する非難は、ヘロドトスも納得していたと考えて差し支えないと思われる。

以上から、ヘロドトスにとつて神託の解釈が重要であることが指摘できるのである。

三 ペルシア戦争と神託

前節で、『歴史』の冒頭を飾るリュディア史の中で主に神託がどのように受け取られたのかを考察し、神託を受け取る時には受け取る側の解釈が重要になつていたことを導き出した。次に、先に導き出したことが『歴史』全体の神託についても当てはまるのかどうかを検討していかなければならない。

『歴史』の中の神託にまつわる逸話に数多く見ることのできるモチーフは、神託を誤解して何らかの災難にあつたとい

うものである。^⑩ そのような例は枚挙にいとまがない。例えば、悲劇的な最期を迎えた、ペルシア王カンビュセス、リュビ
 ア王アルケシラオスなどは、神託の意味を誤解した典型的な例であった。彼らの破滅に至るパターンは、クロイソスの例
 と重なる。そのようにパターン化された神託にまつわる逸話は、ペルシアとの戦いを語る時にも現われる。当然、ペルシ
 アとの戦いに関連した神託が多く紹介されるばかりか、前兆や突然の奇跡なども多く記されるようになる。それゆえ、主
 に本稿で取り上げるのはそういったペルシアとの戦いに関わった神託である。

ペルシア戦争を記述するにあたって、ヘロドトスが多く用いた神託の中でここで取り上げるのは、エウボイア人とペル
 シア軍司令官マルドニオスがうけた神託である。

エウボイア人が被った災難について、ヘロドトスの言葉は、以下のようになる。

「……エウボイア人達がバキスの予言を偽物と軽んじて扱い、来る戦争に何も手を打たず兵糧を貯えなかつたために、突然の不幸
 が彼らを襲ったのである。というのも、バキスの中にこのこと（彼らが災難に遭うことについて）について次のような予言がある
 から。……この直面した状況においても、また、来る不幸においても、この予言を無視した彼らに最悪の苦難に遭うのも仕方な
 いことだった。」（八一—〇〇）

神託を無視したエウボイア人に対するヘロドトスの批判は、手厳しい。また、この言葉をヘロドトス自身の見解と受け
 取ってよいだろう。そうだとすれば、神託の曖昧な語句を誤解する場合にも、同じような批判は予想される。

神託を誤解する例は、ペルシアの敗北が決定的になる時にも見出すことができる。プラタイアの戦いの前夜、ペルシア
 軍の指揮官マルドニオスはペルシア軍の兵たちに、ペルシアの破滅を予言した神託は実現せず、ペルシア軍の勝利は確か
 であることを告げる。しかし、それについてヘロドトスが次のように述べる。

「ところで、マルドニオスがペルシア軍のものであるといった神託がイリュリア人なるエンケレイアの軍に告げられたものであり、
 ペルシア軍のもでないということを私は知っている。そして、この（ペルシアとの）戦いについて下されたバキスの神託は……

さらに、ペルシア軍に関して、ムサイオスに同じようなものが他にあることを私は知っている。」(九一—四三)

ヘロドトスは、マルドニオスが持ち出した神託は、実はペルシア軍について下されたものではなく、ペルシア軍に関するものは別のものであると、わざわざ指摘している。この例は、先ほど述べたように戦争の勝敗が決定的になる時に現われることから、ここにおいても、やはり神託をいかに正しい解釈するかということが重要と考えられていたことがうかがえよう。

一方、神託の意味が理解され成功を取めた例についても、検討しなければならない。こうした神託の解釈で興味深いものは、サラミスの海戦直前に下された神託に対するアテナイ人の対応である。もともと、これらを単純にヘロドトス自身の考えとすることは困難かもしれないが、ヘロドトスの考えを補う意味で取り上げることとする。

アテナイにたいへん長い神託が下された後、アテナイにおいて神託の解釈をめぐって人々の間で激しい議論が展開される。その議論の最大の焦点は、神託の中の「木の砦」をどのように解釈するかであった。様々の解釈の中でも、アクロポリスがペルシアの攻撃に絶えて残ると解する者と、船のことと理解して海戦の準備を提案する者とに大きく別れたという。そして、ヘロドトスの言うところによれば、後者の解釈に専門的な神託の解釈者であるクレースモロゴスの解釈がみあわなかったけれども、そこで新たにテミストクレスの解釈が加わり、その結果、大勢が海戦準備に傾いたという。すなわちテミストクレスは、アテナイの海軍の破滅を意味するとクレースモロゴスが解釈した神託の中の語句「聖なるサラミス」に着目し、もしアテナイ海軍の破滅を告げるならば、「非情なるサラミス」というはずだと解釈し、それが人々に認められたのであった。

この神託の解釈をめぐる逸話で、次のことに注意するべきだろう。まず、神託の解釈の正しさは専門的な知識によるというよりは、各個人の良識によるところが大きいうことである。神託について、多くの解釈があらわされ、しかも専門的な解釈者であるクレースモロゴスの見解は、この場合には認められず、テミストクレス個人の解釈が大きな影響を与

えたのである。^② また、この逸話の前後へロドトスの言葉にも微妙な変化が見られるように思われる。この逸話の前に、ヘロドトスは、ギリシアを救ったのはアテナイであるというアテナイ擁護とも取れるような見解を述べているが、そこでアテナイに下された二つの神託について次のように言う。

「デルポイから下され、（アテナイ人を）恐怖に陥れた恐ろしい神託も彼らをしてギリシアを捨てさせることができず、アテナイ人は踏みとどまって敵の自國への侵入を迎えたのであった。」（七一—三九）

しかし、神託の議論が終わった後へロドトスは、アテナイ人が「神託の趣旨にそって」海戦の準備を決したと記し、矛盾したことを述べている。しかし、この口調の変化は、テミストクレスの神託の解釈に彼がその妥当性を見たからと考えられよう。

以上の検討により、次のことが明らかになった。

まず、ヘロドトスの神託に対する信頼は動かしがたいが、彼にとって同様に重要だったことは、神託の正しい解釈であったということも指摘できるだろう。^③ 解釈とは、広く偽物を見分けるところから、神託を適切な場面に用い、また神託の語句の微妙な真意を理解するところまで含まれる。曖昧な神託や偽物の神託があることも彼は知っていたに違いない。それだからこそ、受取る者の解釈が問題になったのであろう。ヘロドトスは、正しい解釈をして成功を取めた場合には何も言わないが、神託を理解できなかったり、誤った解釈をしている場合には自ら解釈を試みた。そして、その顕著な例が、冒頭のクロイソスの物語であった。それはペルシア戦争の経過の語る時にも見られ、解釈が神託を受け取るものにとって重要であったということが、ヘロドトスの念頭にあったことができるだろう。

① ヘロドトスの信仰については、藤縄謙三「ヘロドトスの信仰」『歴』 Hdt. VII:77.

② 史学の起源——ギリシア人と歴史』（力富書房、一九八三年）二八〇 ④ H. Stein, *Herodotus*, Berlin, 1962, S. 60.

頁一三〇—頁がたいへん参考になった。

⑤ マンゼンの神託について H. W. Parke, *The Oracles of Zeus*,

② Parke and Wormell, op. cit., vol. 2, p. VII.

Oxford, 1967. を参照。

- ⑩ Hdt. VII-6.
 ⑪ Hdt. VI-66.
 ⑫ M. E. White, "Herodotus' Starting-Point", *Phoenix*, 23 (1969), p. 45 ff.
 ⑬ H.-P. Stahl, "Learning through Suffering? Croisus' Conversation in the History of Herodotus" *Yale Classical Studies*, 24 (1975) p. 1-36. 中務哲郎「クロキュロス『歴史』の序文終章・キタロコス観」『西洋古典学研究』三四 一九八六年 三三頁以下。藤縄謙三『歴史の父・クロトス』新潮社、一九八九年 第一部 第二章「シロイン」物語 三二頁—四二頁。
 ⑭ リヒキヤニ史に關する神託は次の通り。Hdt. I-7, 13, 19; 47; 53; 55; 85; 91.
 ⑮ Hdt. I-47; 53; 55; 85; 91.
 ⑯ Hdt. I-62; 64; 65; 66; 67; 84.
 ⑰ Park and Wormell, op. cit. vol. 1, p. 139.
 ⑱ Fontenrose, op. cit., p. 111.
 ⑲ Fontenrose, op. cit., p. 62, 80, 111 ff.
 ⑳ Hdt. I-91.
 ㉑ Hdt. I-62 f.

第三章 トウキユディテスと神託

一 前兆か自然現象か

- ⑳ Hdt. I-66 ff.
 ㉑ そのような例として I-65 のポカイマ人の植民の例、I-57 のサモス人の例がある。
 ㉒ Hdt. III-64.
 ㉓ Hdt. IV-163.
 ㉔ I-67 のスキュロス島のテタマブ攻略の例、VI-52 のスキュロスの二王家の起源に關する例などが挙げられる。
 ㉕ Hdt. VII-140. この神託については、従来は、神託が下された時期について多くの論争があった。パークは、この神託がテルモビュライの戦いの直後に下されたとし、テミストクレスの策略がそこにあったのではないかと考える。フォンテンローズも、テミストクレスの存在は否定せず、この神託について論じている。Park and Wormell, op. cit., vol. 1, p. 169 ff.; Fontenrose, op. cit., p. 124 ff.
 ㉖ Nilsson, *Cults, Myths, Omacles, and Politics in Ancient Greece*, Lund, 1951, p. 126.
 ㉗ クロトス自身、神託の解釈をしている例がある。キレネ王ハットスの名について、ヘロドトスは他の人々の見解を支持せず、神託の言葉にしたがった見解を述べている。cf. IV-155.

前章で、ヘロドトスがどのように神託をとらえていたかを検討し、神託の正しい解釈の重要性を指摘することができた。本章では、ヘロドトスよりも遅い時期に活躍し、ペロポネソス戦争について書き残したトゥキユディテスがどのように神

託を見ていたかについて考察する。しかし、ヘロドトスに比べて、トゥキュディデスは神託を多く記していなかったので、考察を補強するために、神託の他に、前兆などの言及についても、若干考察を試みることにする。

さて、大きな災害が将来起こることを示すために、地震や日食、あるいは特異な現象を予兆として神が人間に送るということはギリシア人に広く受け入れられた考えであった。しかし、一方で前五世紀に自然哲学が発達したことから、自然のもたらす単なる現象としてそれらが説明されることもあった。^① それでは、トゥキュディデスは、それらの自然現象をどのようにに記しているだろうか。次に挙げるのは、戦争の経過の中に時折現われる地震、日食、津波についての記述である。

「さらに開戦の少し前に、デーロス島に地震が起こったが、ギリシア人が記憶している限りでは起こったことがなかった。来るべきことがしめされたと言われ、そうと信じられた。」（二一八）

「同じ夏、新月の時、この時しか起こり得ないとされているように、暈すぎに、太陽が三日月型に欠けていくつか星も現われたが、再び円形に戻った。」（二二八）

「地震の後に津波が起こることについて）……私がこのような現象の原因と判断するのは、極めて強い地震が起こったところでは振動のために海水が一方に押しやられ突然さらに激しい力でもとの位置に戻されるので、海水の洪水が起こるのである。つまり地震がなくては、このような現象が生じることはないと思われる。」（三一九）

これらの日食や津波などの自然現象について見ると、トゥキュディデスがそれを前兆と結びつけて考えていたのかどうか明らかでない。^② けれども、デーロス島の地震について触れる時に、引用であることを注意深く示すとおり、単なる自然現象と捉えていたと考えることができる。^③

しかし、自身の見解をはっきりと述べた津波の原因の考察は、確かに津波と事件の関係を否定するものの、津波の原因となる地震がなぜ起こったのかについては、何も説明がなされていない。また、これらの記述が断片的なものであることから、トゥキュディデスが自然現象と事件との関係を意識的に認めていたのか否かについて答えを出すことはできないで

あろう。けれども、トゥキュディデスが自然現象について触れているところは、以上の断片的な記録の他にも一箇所あるので、それに目を向けてみよう。

次に示すのは、戦争の経過を記す際の方法論と呼べるような内容を記述した後、戦争の規模について語った一節である。

「過去の事績の中でもっとも大きいものはペルシア戦争であったが、これは二度の海戦と二度の陸上戦ですみやかに勝敗が決まった。しかし、この戦争（ペロポネソス戦争）は長く続き、ギリシア本土においても、同じ期間において今までになかったほどの災害が起こった。……以前には言い伝えにはあったけれども実際にはめつたに起こらなかったことを信じざるをえないこととなった。例えば、ギリシアのほぼ全土をゆさぶった大きな地震がおこり、日食も古い記録から知られるよりも頻繁に起き……。」（一—

一三三）

トゥキュディデスが取り上げようとした戦争が今までにないほど規模の大きいものであると述べている箇所は、この部分だけではない。序文においても、ギリシアの発展についての叙述においても、戦争の規模がいかに大きいものであったかを、彼はほのめかしている。先に示した言葉は、戦争を全体的に見渡して得た見解であろう。その中で注意したいのが、自然現象と戦争とを結びつけて説明している点である。このようにはっきりとした関連が見られる言及は他になく、トゥキュディデスの姿勢を決定するまでにはいたらないけれども、繰り返し述べる戦争の規模の大きさを、頻繁に起こった地震や日食などの自然現象を証拠にして示そうとするトゥキュディデスの、この言葉は、当時の伝統的な思考に対する彼の姿勢を考える上で、大きな手がかりとなるのではないだろうか。

また、戦争の規模について語る直前に、自分が戦争を記すのは事実にしたがっているということ、彼の先人たちが興味本位に語る「物語」を批判し、それと対比させながら、明確に述べている。正確さ、真実といったものを強く意識していることをうかがわせるのは、他にもあるから、彼のこのような態度は、一時的なものではなく、戦争が行なわれていた

間一貫してあったものとも考えられる。そのようなことから、現在に残されている彼の記述は、彼のそういう意識が働いて、記すに足るものと考えられた結果とみなすことが可能だろう。

それでは、そのような意識の働いた中で神託はどのように記されているだろうか。

二 トゥッキュディデスの残した神託の検討

トゥッキュディデスの『戦史』の中で神託について語られることは少ない。その上、彼自身コメントをほとんど付け加えないため、彼が神託についてどのように思っていたかを知ることが、極めて難しいことである。

トゥッキュディデスは、神託を一五例残しており、ヘロドトスに比べると、数が少ない。しかも、それらに関する彼の言及は、神託に対して批判的であるとされているので、この批判がどのようなものかを確認しなければならぬ。

最初に、前五世紀に頻繁に姿を現わすクレースモロゴスの存在について見てみよう。神託解釈者、卜師、おみくじ売りであった彼らの実態は、今ではほとんど明らかにされない。そのようなクレースモロゴスについて、トゥッキュディデスは、次のように述べている。

「……そして、これから戦争をしようとするポリスや他のポリスで、多くの予言が歌われクレースモロゴスたちが多くの神託を繰り返して歌った。」(二一八)

「一派を作った者たちは激しい論争を行なったが、出兵を主張する者もあれば、出兵をしないことを主張する者もいた。クレースモロゴスたちもあらゆる種類の予言を繰り返して言い、人々はそれぞれ争ってそれらを聞くとした。」(二一二)

これらの言及を見る限り、クレースモロゴスは戦争の不穏な雰囲気を表わす存在として描かれているにすぎないというマリナトスの指摘は妥当といえる。⑥ そもそも、トゥッキュディデスは、クレースモロゴスが何を言ったかについて具体的に触れていない。

さらに、このことは、シケリア遠征をめぐる記述にも当てはまる。シケリア遠征に先立って神託が下されたことは、シケリア遠征軍が壊滅したという知らせがアテナイに届いた時の状況からうかがうことができる。しかし、どのような神託が下されたかということは、トゥキュディデスの記述から知ることはできない。^⑦

トゥキュディデスが神託に批判的であるという見解の根拠としてたびたび挙げられるものについて、次に、検討する。まず、アテナイで疫病が流行した時に議論された神託に関するものがある。その議論は、ある古い神託の中の語句が「疫病 *typhos*」と「飢餓 *nyctis*」のどちらをさすのかというもので、結局、当時疫病が流行していた状況から、人々は神託の言葉は疫病について述べていると理解したという。それについてトゥキュディデスの感想は次のとおりである。

「というのも、人は記憶を自分の苦しみにあわせるから。もし、いつか、別のドーリア人との戦争がこの後起こり、たまたま飢餓が起れば、彼らはそのように（飢餓を）引用するだろうと私は思う。」（二一―五四）

この言及を見ると、批判は、神託そのものの性質に向けられているというよりも、人々の安直な態度の変化に向けられていることがわかる。神託自体について何も批判が無いことから、この言及によって神託そのものに批判的であったとすぐに引き出すことはできないだろう。

次に取り上げるのは、ペロポネソス戦争が二七年続いたとするトゥキュディデスの見解が述べられた後に現われる、神託に関する彼の言及である。当時、彼の見解の他に和平期間をはさんだ二つの独立した戦争からなるという見方があったようである。戦争が何年続いたかについて触れる時、トゥキュディデスの言葉は次のとおりである。

「……この様に最初の十年の戦争とそれに続く曖昧な平和期間と其後の戦争と共に、順に数えて、そのような年とまた多からぬ日々が過ぎたことがわかり、また、神託について何らかの信頼をする人にただ一つの神託、予言だけがはっきりと実現することがわかるだろう。」（五一―二六）

この箇所は、神託を信じないトゥキュディデスを裏付ける強力な根拠となっている^⑧。オーストも、この部分では、彼が

神託を信じていないと考え、トゥキュディデス自身になんらかの変化があったのではないかと推察する^⑨。また、トゥキュディデス自身の心境の変化について、ドーヴァーもオーストの意見とほぼ同じである。ここでトゥキュディデスが神託を信じていない根拠として挙げられるものは、「ただ一つのこのことが *known by sight*」という強調である。このような表現は、トゥキュディデスにかなりの確信があった時に使われるものと指摘されている。

ここで、もう一度、前に挙げた文に戻ってみよう。ここで注目したいのは、「はっきりと実現する」という言葉である。もし「はっきり」というのがだれにも否定しがたい数字をさしているとすれば、この意味は、神託の文字どおりに、神託で予言されたことが誰の目から見てもはっきりと実現したということになる。すなわち、たった一つの神託とは、神託をみて容易にその意味を理解することのできる神託をさすと考えられる。そのように考えると、それ以外は全てが実現しないものという意味ではなく、神託と結果が容易に結びつくことがないもの、つまり、神託の言葉にはっきりと告げられているものが少ないということになる。ここから、トゥキュディデスが神託の曖昧さをある程度念頭に置いていたと想定することもできるだろう。

次に検討するのは、ペロポネソス戦争直後のアテナイの様子について触れられる中に現われる神託についてである。アテナイの市中には、ペラルギオンと呼ばれる場所があったが、デルポイの古い神託によって、そこに住むことが禁じられていた。ところが、ペロポネソス戦争のためにアテナイ市民が籠城を始めると、市中の至る所に非難してきた人々が住んだ。そして、神託の禁止にもかかわらず、ペラルギオンにも人が住んだのである。これに関して、トゥキュディデスは次のように述べる。

「私には予想されていたものと反対のことが実現したと思われる。というのも、掟に反して住居を構えたためにポリスに不幸もたらされたのではなく、戦争のために住居の必要が生じたと思われるからだ。また、戦争とは言っていないけれども、良くない時いつかペラスギオンに住むことを神託は予知していたのだ (*to paueron roophen*)」(二一七)

この部分に関して、神託の予言能力をトゥッキュディデスが信じていたかについて議論が集中する。例えば、パークは、この言及の前半部分の「予想されていたものと反対に実現された」という箇所を重視し、トゥッキュディデスが神託を信じなかったとする¹¹⁾。また、パウエルは、トゥッキュディデスが戦争とペラスギコンの状況を超自然的要因を介さずに直接の原因と結果として説明している点を強調して、彼が神託を信じていなかったとする¹²⁾。しかし、そのように考えても、「神託は予知していたのだ」とトゥッキュディデスははっきり述べている点を、どのように解釈するかが問題となる。パウエルは、「予知する *prophesie*」という言葉が、トゥッキュディデスの場合、神託に使われているものはこの箇所以外になく、ほかはすべて人的な要因に使われているのみとする。すなわち、トゥッキュディデスは、事件を説明するために、その原因を神託や前兆といった超自然的要因ではなく、人的要因に求めたのであり、そのような観点から見ると、トゥッキュディデスは超自然的要因を信じていなかったことになる。また、パウエルは主張するのである。また、この箇所について、ゴムは、「この戦争を予言していたという一般の迷信は否定していたが、神託の予知能力を信じていた。……ペラルギコンが占拠される時にはアテナイに災難が降りかかるということでけは予知にならない。」としているが、信じるか信じないかといった視点からみたゴムの見解では結論が見出だせない¹³⁾。おそらくゴムは、神託が予知するといったトゥッキュディデスの言及と懐疑的なトゥッキュディデス像を結び付けようとして無理が生じたと思われる。

このように、二人の議論は、神託の予知能力を信じるか否かという点に集中している。しかし、筆者が指摘したいのは、トゥッキュディデス自身神託を解釈していることである。神託とその後何らかの災難が起こった時に、自分なりに神託の意味が通るように解釈するということは、彼にとって重要であったと思われる。神託についてあまり多くを語らないトゥッキュディデスにさえ、神託を解釈する態度を見ることができたのである。

さて、神託の解釈という論点がここであらわれてきたので、それについて考えられる例を取り上げよう。それは、アテナイに僭主政を打ちたてようとして失敗した者が受取った神託である¹⁴⁾。トゥッキュディデスは次のように記す。

「デルポイに神託を伺いにいったキュロンに、神はゼウスの最も大きな祭りの時にアテナイのアクロポリスを取るように命じた。……キュロンは、ペロポネソスのオリュンピア祭が来ると僭主政を打ちたてる目的で、アクロポリスを占領した。というのは、オリュンピア祭が最も大きなゼウスの祭典であり、オリュンピア祭に勝った彼自身と何らかの関係があると、彼は思ったからである。しかし、最も大きな祭りがアッティカにあるいは他のどこかということを知ることができなく、神託も明らかにしなかった。（というのも、メイリキオス・ゼウスの祭典がアテナイで最も大きく……）」（一一二六）

この中に現われるキュロンに授けられた神託は、曖昧な神託の典型である。ここで、興味深いのは、神託の語句の曖昧さだけでなく、キュロンの解釈が不十分であったことをトゥキュディデスが触れて、オリュンピア祭ではない、別の解釈を付け加えていることであろう。彼が付け加えた言葉が、神託に対する彼の解釈とするならば、その態度は先に検討したペラルギコンにまつわる神託に対する態度との共通点を見出だすことができる。

以上の考察から、トゥキュディデスの神託に対する態度について、次の点が指摘できる。

まず、トゥキュディデスが非難したのは、神託そのものではなく、神託を受け取る人々や、神託を使って人々をあおりたてる人々であったことが確認できた。神託そのものに向けられているとはつきりとわかる彼自身の非難は、皆無であった。ここから、従来言われていたとおりに、トゥキュディデスが神託に批判的だったと断言することは妥当とは言えない。とはいえ、神託を受け入れていた根拠として明確に示すことのできる部分もなかった。

もっとも、神託に対する彼自身の態度に変化があったということも考えられる。トゥキュディデスが神託について比較的多く触れるのは、彼の歴史叙述の前半部分である。後半のクライマックスといえるシケリア遠征に関する神託は、神託が下されたことがうかがえるものの、実際にそれがどのようなものだったのかを知ることができなかった。彼の沈黙が何を意味するのかは、何も手がかりがなく推察の域を超えることができない。しかし、前半に現われた神託などについての言及を見ると、批判の方向は、すべて神託を受け取る人々や神託を利用する者たちであったから、彼にとって、神託と人

の区別は、我々が考えるよりもはっきりしていた可能性が大きい。それゆえ、神託や予兆を知らせる神々と人々の境界線も明確なものであって、宗教的な領域は、彼の信心に関わらず戦争という世俗的な領域とまったく別の次元で語られなければならないと彼が考えていたととらえることもできる。しかし、以上の考察から、彼自身が何らかの形で神託を解釈している点は、例が少ないながらもはっきりと見て取れよう。解釈をするということに何らかの意味を彼が見ていたということができるのである。

- ① M. P. ニルソン(小山宙丸他訳)『ギリシア宗教史』創文社、一九九二年、二五三頁以下。
- ② A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides*, Oxford, vol. II, 1956, p. 88 f.; P. J. Rhodes, *Thucydides History II*, Eng-land, 1988, p. 12-13, 212.
- ③ Gomme, op. cit., vol. I, p. 151. Oost, op. cit., p. 187.
- ④ Thuc. I-1.
- ⑤ Thuc. I-20 ff.
- ⑥ *Marinatos, Thucydides and Religion*, p. 51 f.
- ⑦ シケリア遠征に先立って下された神託について知ることができるの

- ⑧ プタルロスの作品から *Plut. Nic. 13 f.*
- ⑨ Powell, op. cit., p. 45.
- ⑩ Oost, op. cit., p. 192.
- ⑪ Dover, op. cit., p. 71 f.
- ⑫ Parke and Wornell, op. cit., vol. I, p. 190.
- ⑬ Gomme, op. cit., vol. 2, p. 65 f.
- ⑭ <ロドトスに> 同じキクロンの反乱についての記述があるにも関わらず、<ロドトス>は神託について何も触れてはいない。cf. *Hdt. V-71*

第四章 二人の歴史家の比較をとおして——知恵としての解釈

前の二章で、ヘロドトスとトゥキュディデスが神託をどのように見ていたかを、個々の事例に沿って検討した。本章では、個々の検討から得たものをふまえて、二人の史家の神託に対する態度を比較して、相違点と共通点を明らかにしたい。ヘロドトスは百にもよる神託を残し、クロイソスの破滅から始まりベルシアの敗北まで一貫して神託をもちいた。一方、トゥキュディデスの歴史叙述には、神託の数も少なく、戦争全体を説明できるような枠組にはなっていない。これは、

ただ単に二人の取り上げた歴史の対象の違いで説明できないように思われる。

戦争と関わる部分に限って考えてみても、違いは明らかである。ヘロドトスはペルシア戦争の経過を記す際、戦争の勝敗を裏付けるのに神託や前兆をたびたび持ち出した。すなわち、戦争の勝敗はあらかじめ決められたものとして見ていたと考えられる。ところが、トゥキュディデスの場合、ヘロドトスのように、戦争の勝敗を直接神託や前兆で説明しているところはなかった。彼の触れる神託や前兆は、ある事件の証拠として持ち出されるのではなく、それらをめぐる人々の対応を示すために利用されたものだった。

ここで、もう少しヘロドトスとトゥキュディデスの違いをはっきりさせるために、一人の政治家の評価について見てみたいと思う。それは、二人とも取り上げている人物、テミストクレスである。彼は前五世紀初めのペルシア戦争において活躍した人物であるが、二人の記述から彼の政治家としての手腕をよく知ることができる。

まず、ヘロドトスの評価についてみよう。彼のテミストクレスに対する評価は概ね芳しくないものであるとしばしば言われてきた。テミストクレスは政治的な手腕に長けた人物として描かれているものの、一方で金銭がらみで低い評価も逸話に見られる。彼がサラミスの海戦にあたって木の砦の神託を解釈したこと、アテナイが船を持ち海軍力を備えるきっかけになったのも彼の提案によったこと^②から、彼の才能の高さを知ることができるのである。テミストクレスについての様々な評価のある逸話が『歴史』の中に多くあるのは、ヘロドトスが自ら得た情報をそのまま読者に提供するという、彼にしばしば見られる手法のためと考えられる。それゆえ、ヘロドトス自身テミストクレスをどのように評価していたかはっきりと知ることができない。

一方、トゥキュディデスが、テミストクレスについて、船の建造を提案しアテナイが海軍において秀でるようになった経過に触れるのは、ヘロドトスと同じである。しかし、テミストクレスに対する評価は、彼をはっきりと讃える点で、ヘロドトスと全く違う。トゥキュディデスは、テミストクレスの能力の高さを讃える中に次のような指摘がある。

「……差し迫った現状にたいして鋭い判断をくだし、未来のことについては限りなく遠くまで見通して予測をたてる人物であった。……彼はまだ定かではない状況におけるよいことと悪いことにもっとも明快な予見をたてた。……」(一一—一三八)

このように、トゥキュディデスはテミストクレスを評価する。そこで、注目したいのは、評価の根拠になっている彼の判断力であろう。この将来の事態に対して予想をたててことにあたるテミストクレスのこの能力は、トゥキュディデスによれば生れつきの能力でもあった。テミストクレスの先見の明を評価するトゥキュディデスの態度は、明らかにヘロドトスと異なるのである。

また、テミストクレスについての評価の仕方は、彼らの歴史叙述の手法の違いを表わしてもいよう。ヘロドトスは必ず、いくつかの意見がある場合はそれらに自らの意見を述べることなく、それらを読者に提供するだけであった。そのため、彼の真意のほどはともかく歴史の中に組み込まれる形となってしまう、テミストクレスの数々の逸話の中にまでそのような方法が現われたと考えられる。ところが、一方、トゥキュディデスの場合、そのような方法は、事実ではない伝説を無批判に受け入れることになり、彼が非難すべきものであった^③。彼が自らの方法論について述べる時、ヘロドトスへの批判が念頭にあったということはしばしば指摘されている。

さて、テミストクレスの評価について、二人の歴史家の明らかな違いは、人間の先見の明を意識して評価するかということである。まず、ヘロドトスにはこの性質について取り立てて評価する箇所は見られなかった。ヘロドトスは、「木の砦」をめぐるアテナイ人たちの協議について触れた後、テミストクレスが戦争に備えるために艦隊を建造することを提案し、アテナイが海軍国になった経緯にも触れている。彼の提案は、まさに、将来の戦争に備えるという先見の明にあたるものと思われるが、ここにおいても、ヘロドトスは、彼の知見について取り立てて強調する様子はない。アテナイがペルシアを迎え撃つことを決議した時も、「神(ここでは「木の砦」の神託を指す)にしたがって *τῶν θεῶν θεολογῶν*」を前面に押し出していることから、彼にとって神託をはじめとする超自然的要因がはじめにあって事件が動くという思いが大きか

ったのだと思われる。

それに対し、トゥキュディデスは、人間の先見の明を意識的に評価する。これは、神託に対する姿勢にどのように関わってくるだろうか。単純に考えれば、人間が未来について知ることができれば、神託や前兆などの超自然的な要因を用いなくともよいことになる。事実、トゥキュディデスは、戦争が「大きく、これまで起こった中で最も特筆すべきものになろうと信じて」その経過を記しはじめたと序文に書いているから、彼にとって人間の先見の明は意識すべきものであったのである。このような意識が、信じるに足る神託がない時に神託や前兆の代わりとして現われたと考えられる。事件と神託を密接に結びつけて考えようとするヘロドトスとは異なるのである。^④

かかる違いは、二人の歴史家の経験からくるものと思われる。トゥキュディデスは、自ら述べているように、実際に戦争におもむいた軍人でもあった。それゆえ、ヘロドトスがたびたび記すような戦争中の奇跡などをはっきりと目にするとはなく、歴史を記す場合は保留したのだと推測できる。もちろん、これはあくまでも推測の域を出ない。しかし、彼自身の言及の中で、そのような要因を全く排除すると述べる箇所も見られないので、直ちに超自然的な要因を迷信として排除していたと断言することはできない。

さて、彼らに以上のような違いが歴然とあり、それが全く接点を持たないように見えるが、二人に共通した姿勢があったことも確かである。それは、神託を正しく解釈することの重要性である。

ヘロドトスは、冒頭のクロイソス物語の中で、運命の変転、因果応報の歴史観をあらわしたが、神託について言えば、神託の解釈も重要であるという点も、例証してみせた形になった。そして、それは、『歴史』全体にわたって見出すことができるばかりでなく、戦争の核心に近づくにつれて、神託の解釈の誤りを指摘し、さらには、非難するという態度がはっきりと見ることができた。ヘロドトスの態度を見る限り、神託の解釈は、偽物か本物かを見分けることから、神託の曖昧な語句を正しく理解することまで含まれる。この神託の解釈が、神託を受け取った者の最大の義務であった。それゆ

え、これを怠り、神託を誤解し、悪い結果に終わっても、神託の信用にかかわるのではなく、受け取った者が非難される理由となりえたのである。さらに、神託の解釈という点において、トゥキュディデスもヘロドトスと同じ立場に立っていたことが先の考察で明らかになった。曖昧な神託について、彼が解釈をするという点が、ヘロドトスよりもはっきりと見ることができたように思われる。神託をめぐる人々の態度を非難しつつ、トゥキュディデスなりに神託と現実の状況をうまく結び付けようとしているところがいくつも見出されたのである。ただ、トゥキュディデスは、はっきりと神託の解釈が重要であるとは言っていないので、それをどこまで認識していたかを知るのは困難だった。しかし、先に見たキュロンの授かった神託をめぐるトゥキュディデスの解釈を見る限り、神託の正しい解釈が受取った者の責任であるということは、ある程度、トゥキュディデスの頭の中にあつたと考えることができる。

また、神託の解釈が広い意味で偽物と本物の区別も含むなら、彼が偽物と判断した神託は、自然と彼の書き残そうとする対象の中には入ってこないことになる。それは、彼のクレースモロゴスに対する態度の説明にもなるであろう。

神託の解釈という点で、二人の史家に共通点も見出すことができた。しかし、これは人間の知恵という点から見れば、ヘロドトスもスパルタ人がテゲア攻略に成功したことに際して神託を解釈できたことを「知恵と運とによって」と一言述べているので、神託を下されてからの成否の鍵は人間にかかっていたと言うこともできる。人間のレベルで、神託が問題になった時、知恵としての解釈が改めて浮き彫りにされるのである。このように、人間の持つ知恵を用いて神託を解釈しなければならぬ点において、二人の歴史家の神託に対する態度を結びつけるということができないのではないであろうか。

① Hdt. VIII-4 ff., 108 ff.

② Hdt. VII-143 ff.

③ Thuc. I-20 ff.

④ *ψωφία* とは「合理的な要素を強調する一方、非合理的な要素 *εὐνομία* もトゥッキディデスのえがく歴史の中で目立ち、トゥッキディ

デスが *εὐνομία* をどのように捉えていたかという問題はたびたび取り上げられてきた。本稿ではこの点について論じる余裕はない。これらに
ご参照。 H.-P. Stahl, *Thukydides: Die Stellung des Menschen im geschichtlichen Prozess*, München, 1966, L. Edmunds, *Chance and Intelligence in Thucydides*, Cambridge, 1975, などをご参照。

おわりに

以上の考察から、前五世紀ギリシアの二人の歴史家の神託に対する態度に、神託の解釈という共通点が見られたことを結論として得た。これまでは、宗教的なものに対する二人の態度について、全くといってよいほど対照的に捉えられてきた。このように捉えられるのも、二人が生きた前五世紀のギリシア世界において、深刻な変化があり、その変化の前後に二人の歴史家が位置すると考えられていたからである。その深刻な変化とは、プロタゴラスやヒポクラテスなど、ソフィストや自然哲学の発達により、懐疑主義が台頭し、伝統的な宗教を揺るがす変化であった。^①ペロポネソス戦争による影響で、伝統的な価値観を保ち続けることは困難であったに違いない。しかしながら、前四世紀アテナイの国制は、宗教を退ける方向に必ずしもむかっていない。制度面の宗教保持という建前と、前四世紀当時の人々の、宗教に対する実際の心情が、どこまで調和していたのかという問題がある。けれども、宗教そのものを全面的に否定しようとするような言及は見られないことから、先に述べた影響はあったにもかかわらず、古代ギリシア社会には、依然、根強い宗教の伝統が生きていたということができようであろう。

そのような根強い宗教的伝統の一つに、自分たちを守ってくれる神々とギリシア人の関係の「強さ」をここで述べてみたい。すなわち、祭儀をとり行なうことは、ギリシア人にとって、神々が彼らとの関係をよく保ち、神々に守ってもらうためには欠かすことのできないものであった。それによって、神々から人間の知恵でははかり知れないことを徴として授かるとういう考えがあったのである。このような考えは、神々と人間との領域の区別がはっきりとしていたことのあらわれということもできよう。^②神々が徴を送った時、神々との間に超えることのできない境界を持つ人間にとっての最大の責任が、徴、すなわち神託や前兆を読み取って、未来の災難に備えることであり、それは、神々との関係を重視する彼らにとって、神々に敬いの念を表すことも意味したのである。

さて、そのような中で、これまで対照的に捉えられていた二人の歴史家の、宗教に対する態度に、解釈の重要性という共通点が見られたことは、次の点で意味のあることと考えられる。まず、これまで、対照的に捉えられがちであった二人の歴史家の宗教的な領域における評価、ひいては、歴史家としての評価にわずかでも再検討の余地を見いだした点で、意義のあることであろう。そして、二人に共通してみられた、神託の解釈の重要性は、古代ギリシア人の宗教に対する特質を明らかにし理解していく上で、一つの示唆を与えてくれるように思われる。

かかることが明らかになったといえ、本稿の対象は、前五世紀の二人の歴史家という、非常に限定されたものであった。本稿において得られた結論が、どこまで具体的に古代ギリシア人一般の特質を表すものとして示すことができるのかという点については、検討の余地があるだろう。それについて論じることは、今後の課題としたい。

① Muir, op. cit. p. 191-218.

② Sourvinou-Inwood, op. cit. p. 303.

Oracles and Ancient Greek Historians in the 5th Century BC

by

AOKI Chikako

It is often said that ancient Greek society, the *polis*, had a close relationship to religion. Greek religion had neither dogma nor priesthood, but the Greeks thought it important to perform rituals correctly in order to win their gods' favor. Oracles and omens, which were regarded as conveying the gods' will, had a great effect on the Greeks' thought and actions. Studies since the 1950s on Greek oracles have placed emphasis on the examination of their authenticity, but have given insufficient consideration to the question of the Greeks' actual belief in oracles.

In this article, through a comparison of the attitudes of Herodotus and Thucydides, the relationship between the Greeks and oracles, in particular this question of belief, is re-examined. Generally it has been thought that Herodotus believed deeply in oracles and omens as signs sent by the gods to the people, while Thucydides was very scornful of traditional religious thought. However some recent studies concerning Thucydides and religion have argued that he did believe in traditional religion including oracles. In this paper, references to divination in the writings of Herodotus and Thucydides are discussed in the light of such new appraisals. The purpose is not simply to argue in favor of one or other of the alternatives, belief or disbelief, but to attempt to show what the Greeks thought important about the receiving of oracles. It is concluded that the two historians were similar in accepting the importance of the interpretation of oracles. This conclusion offers a new approach to understanding the Greeks' attitudes towards religion.